

農業技術普及に社会的アプローチが与えた影響＜その 2＞

適正技術の確立・推奨技術の実践に与えた影響

国際耕種が 2015～2021 年にかかわった北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト（NUFLIP）では「市場志向型農業」と「生活の質の向上」を活動の二本柱として農家の生計向上に取り組んだ。本シリーズは NUFLIP において、「生活の質の向上」という社会的アプローチが「市場志向型農業」の技術普及に与えた影響を紹介している。

適正技術の確立に与えた影響

農家の収入向上を目的とした市場志向型野菜栽培にかかる適正技術は、試験圃場にて候補となる技術を検討し、農家圃場でその適性を検証した。これは純粋に技術的な取り組みであったため、社会的アプローチから受けた顕著な影響は多くないと思われる。しかしながら、研修教材を作成する際は、同分野で重要視していた、非識字者にもわかりやすい写真やイラストを多用した教材を心掛けた。その結果、研修教材の質を高めることができたと考えている。

推奨技術の実践に与えた影響

一方、適正技術を確立したのち、推奨技術として、農家に実践してもらう段階では、社会的アプローチが与えた影響は大きいと感じている。特に、男女の役割分担やコミュニティ内の高齢者や障がい者、寡婦寡夫といった弱者の包摂を考える「ジェンダー・社会的弱者配慮」とそれらを踏まえて作成する「アクションプラン作成」の研修は重要な役割を果たした。

NUFLIP の対象農家は自給農家がほとんどであり、その栽培技術は粗放であった。そういった農家に集約的な市場志向型の野菜栽培技術を習得・実践してもらうためには、まずは栽培管理に対する考え方から変える必要があった。例えば、毎日の苗床や畑の見回り、マルチや誘引といった野菜栽培においては、基本的な作業もことも、彼らにとっては新しい取り組みであった。

技術研修はグループ単位で実施したが、個人主義の強いグループでは、メンバーは自分の都合を

優先して、協働が少なることから、推奨技術を習得・実践できる農家数が少なくなる傾向があった。一方、協働意識の高いグループは、全員で栽培管理に取り組むため、生産力も高く、個人レベルの推奨技術の定着率も高かった。おそらくは、前者では、個人の行動変容は個人の資質に寄らざるを得ないところ、後者では、グループで取り組んだことで、より多くの個人がその行動変容に影響を受けたと考えられる。また野菜栽培という利益追求の取り組みに、弱者配慮という社会的意義が加わったことで、グループとしての結束力が高まり、結果として野菜栽培技術の定着と実践が促進されたと考えている。この傾向を踏まえ、プロジェクトでは、中盤以降、メンバー全員で栽培管理に取り組む意義を強調し、できるだけ丁寧にアクションプランを作ることを進めた。

農家単位で推奨技術を実践する際も社会的アプローチは重要な役割を果たした。当該地域は伝統的に家庭内において男女の役割をはっきりと分ける傾向があったが、集約的な管理を必要とする市場志向型農業に取り組むには、これまでの役割分担に拘ってはいは、実践は難しかった。ところが、ジェンダー配慮の研修を通じて、農作業を含む家庭内労働を分担するようになった家庭では、研修後も家族みんなで協力しながら野菜栽培に取り組むことができるようになっていた。

全 15 回ある農家研修で「ジェンダー・社会的弱者配慮」と「アクションプラン作成」は、技術研修よりも前に実施した。研修序盤に社会的側面にアプローチすることで、伝統的な役割分担をブレイクスルーし、メンバーの協働意識を高めたことで、その後の技術研修と推奨技術の実践が効果的に進んだものと考えている。



ジェンダー研修の一場面。男女に分かれ一日の仕事を描いてみる。お互いの仕事を知ることにより、家庭内に助け合いが生まれる。